

第2学年 社会科学 学習指導案

日時 平成17年11月11日(金) 第5校時
 学級 一関市立千厩中学校2年B組
 (男子17名、女子16名、計33名)
 場所 2年B組教室
 指導者 教諭 藤原良治

1. 単元名 さまざまな面から見た日本〔4〕 世界と日本の産業・資源

2. 単元について

(1) 題材(教材)について

本単元は、学習指導要領に示された「(3) 世界と比べて見た日本」の「ア 様々な面からとらえた日本」の内容のうち、「(ウ)資源や産業から見た日本の地域的特色」を扱う。

具体的に本単元では、世界的な視野から見た日本の資源やエネルギーの特色、工業や農林水産業等の産業の特色、そして、日本国内における産業の地域的分業、社会環境の変化や自然環境を生かした産業の発展、国際化時代の進展による諸外国との競合の問題や環境・エネルギーの問題を扱う。これらを通して、日本が、エネルギー資源や鉱物資源に恵まれていない国であること、高度な土地利用がなされていること、経済活動が盛んで産業が進んでいること、国内に多様な産業地域が見られること、国際競争や環境・エネルギーに関する課題を抱えていることを学ぶ。

また、本単元は、「日本の自然環境」や「日本の人々の暮らし」、「日本の人口」の学習を踏まえて考察することによって理解が深まり、次の「世界と日本の地域間の結びつき」の学習を多面的・多角的に捉えることができるように構成されている。さらに本単元は、指導要領の内容「(2) 地域の規模に応じた調査」の「イ 都道府県」や「ウ世界の国々」とも深い関連がある。

以上のように本単元は、「世界的視野から見た日本の地域的特色と日本全体の視野から見た国内の諸地域の特色を追究し、我が国の国土の特色を大観させるとともに、地域の規模に応じて、また、地域間を比較し関連付けて、地域的特色を明らかにする視点や方法を身に付けさせる」上で、大切な部分にあたる。

(2) 生徒について

10月に入り、本章「さまざまな面から見た日本」の「自然環境」、「人々の暮らし」、「人口」の各単元を順次学習してきた。この中で、「世界的視野から見た日本の地域的特色と日本全体の視野から見た国内の諸地域の特色を追究」することについて異なるスケールの地図を用いて反復学習してきたため、両者の共通点や相違点を大まかにつかむことはできつつある。しかし、日本の地域的特色を多面的・多角的に考察することについては、今後の学習でも留意して指導する必要があると考える。

さて、アンケート調査(内容等は、別紙資料参照)によると、本学級の生徒の社会科学に対する傾向はおおよそ次のようであった。

社会科学に対する好感度は、「どちらかという嫌い」が3分の2弱を占め、あまり良好な状況ではない。男女ともにこの傾向は同じであった。興味・関心の度合いは、好感度よりも全体的にややポイントが高いものの、「どちらかという興味関心がない」が半数を占め、これもあまり芳しくはない。ただし、これらのことが授業における積極性に大きくマイナスに作用している様には感じられず、授業態度も比較的良好である。また、分野別の興味・関心の度合いでは、地理よりも歴史の方が若干高目であった。

社会のできごとや動きについての話題を授業の中に積極的に取り入れたり、課題を工夫したりして、ニュース・新聞にもっと目を向けるよう指導して、社会のできごとを客観的な情報をもとに見つめることができるようにしていきたい。

また、日本の農業に関する質問では、右の表に示すような結果であった。

「世界比較で見た日本の農業の単位面積収量」について、「多い」が4名で半数は「少ない」との回答であり、事実誤認の傾向が見られた。「世界比較で見た日本の農業の1戸当たり耕地面積」については、3分の2強が「狭い」と回答、「日本の農家や農業人口の動向」については、ほぼ全員が「減少している」と回答し、概ね正しく事実認識していた。さらに、「米」、「乳牛」、「みかん」、「肉牛」に関しての都道府県別生産割合のグラフの判読では、「肉牛」の正答数が3分の2弱であったが、他は8～9割の正答数であった。しかし、農業に関する用語では、1学期に既習の「バイオテクノロジー」を除くと、「高原野菜」と「銘柄米」のみが半数を超える認知度であったが、他の用語については1～2割程度の認知度であり、この部分の知識については殆ど何も持ち合わせていない状況であった。

日本の農業に関する事前アンケート結果(注:最下段の数字は、調査対象33人中の回答人数を表す)

日本の農業の世界比較について			農家や農業人口の動向についてどうなっていると思うか				都道府県別農畜産物生産割合のグラフの判別を正しくできたか				農業に関する「ことば」に関する認知の状況																			
単位面積収量		1戸当たり耕地面積	増加			減少							主業農家	施設園芸農業	わい化栽培	近郊農業	高原野菜	農産物貿易自由化	バイオテクノロジー	農業法人	銘柄米									
ア	イ	ウ	ア	イ	ウ	ア	イ	ウ	ア	イ	ウ	エ	聞いたこと	概要の理解	聞いたこと	概要の理解	聞いたこと	概要の理解	聞いたこと	概要の理解	聞いたこと	概要の理解	聞いたこと	概要の理解						
4	12	17	4	6	23	1	1	31	27	28	31	19	6	3	4	3	2	1	6	2	23	5	6	1	33	15	10	3	16	6

「世界比較で見た日本の農業の1戸当たり耕地面積」については、3分の2強が「狭い」と回答、「日本の農家や農業人口の動向」については、ほぼ全員が「減少している」と回答し、概ね正しく事実認識していた。さらに、「米」、「乳牛」、「みかん」、「肉牛」に関しての都道府県別生産割合のグラフの判読では、「肉牛」の正答数が3分の2弱であったが、他は8～9割の正答数であった。しかし、農業に関する用語では、1学期に既習の「バイオテクノロジー」を除くと、「高原野菜」と「銘柄米」のみが半数を超える認知度であったが、他の用語については1～2割程度の認知度であり、この部分の知識については殆ど何も持ち合わせていない状況であった。

さらに、標準学力検査の結果からは、地図上での位置関係の把握が弱い傾向が見られた。地理的分野に限らず、歴史的分野においても、位置関係の確認には留意して指導に当たりたい。

(3) 単元の指導構想

指導構想の概要

本単元の指導に当たっては、「日本の自然環境」や「日本の人々の暮らし」、「日本の人口」の学習の成果を十分に生かすことができるよう、各単元のつながりに配慮していきたい。特に、「変化する日本の農業」の学習においては、「日本の地形」や「日本の気候」、「日本の食生活の変化」の学習が、農業地域の形成や農産物の生産の面で大きく関わる事項であるので、授業の導入時での復習に繰り返し位置付けていきたい。また、生徒の実態を踏まえ、農業生産の方法や人々の生活については写真等の視覚的な資料等を用いて大事に扱い、地理学習への興味関心を高めながら基本的な用語の定着を図りたい。

本学級は、男女ともに発言等の活発な生徒がおり、授業の推進役になっているが、一方で、注意力の散漫な者も数名見られる。教材の吟味や提示の工夫を進めると共に、反復学習、作業的な学習を積極的に取り入れ、生徒の主體的な学習活動場面を創りだしながら全体の学習意欲を高めていきたい。

校内研究との関わりについて

本校の校内研究主題は、「自ら学ぶ生徒の育成 - 学ぶ意欲と力を培い、基礎・基本の定着を図る指導法の工夫を通して - 」である。自ら学ぶ生徒を育成する上では、授業の組み立ての工夫や教材開発を通して生徒の興味関心を高めることや、各教科の学習の視点や手順を繰り返して指導し身に付けさせることが重要であると考えている。そうすることで、自ら学ぶ意欲すなわち学ぼうとする力や、学習の仕方すなわち学ぶ力が培われ、基礎・基本が身に付くものと考えている。

本単元の指導に当たっては、前述のように、生徒にとって魅力ある教材の開発や教材提示の工夫を進めて学習意欲を高めたり、教科の学び方の視点を繰り返して指導することで学ぶ力を身に付けさせたりして、社会科の資質・能力を培っていききたい。

3. 単元の指導目標

- (1) 日本の資源・産業に対する関心を高め、世界的視野から日本を一つの地域として捉えて国土の特色を掴む活動と、日本全体の視野から大まかに国内の地域差を捉える活動に意欲的に取り組ませる。 (関心・意欲・態度)
- (2) 日本の資源や産業に関して「世界との対比」や「統計資料の比較」、「傾向性を調べる」などの視点や方法で日本の地域的特色を多面的・多角的に考察させ、類似性や傾向性等の特色を明らかにさせる。 (社会的な思考・判断)
- (3) 日本の資源や産業に関する地図や主題図、統計資料、文献などの資料を収集させ、その中から学習に必要な情報を選択して調べさせるとともに、考察した結果をまとめさせ、発表させる。 (資料活用の技能・表現)
- (4) 地域的特色を明らかにする視点や方法を身に付けさせ、世界的視野から見て日本はエネルギー資源や鉱産資源に恵まれていない国であること、高度な土地利用がなされていること、経済活動が盛んで産業が進んでいることを理解させ、国内では地域の環境条件を生かした多様な産業地域が見られること、国際競争や環境・エネルギーに関する課題を抱えていることを掴ませる。 (知識・理解)

4. 単元の指導計画と評価規準 (総時数 6 時間)

学 習 項 目	時 数	学 習 内 容	社会的事象への 関心・意欲・態度	社会的な思考・判断	資料活用の技能・表現	社会的事象についての 知識・理解
世界と日本の産業・自然			変化する日本の農業や工業などの産業の学習を通して、農産物の貿易自由化と日本の食料自給率についての課題意識や先進工業国日本の抱える課題等に関心を持ち、これからの日本の産業の在り方を考え、身近な地域の産業に目を向けようとしている。	日本の産業の特色と課題について世界との比較・関連の中で説明したり、国内の産業の発展について社会環境の変化や自然環境から考察したり、産業の発展がもたらす労働者の移動や地球規模での環境問題などについて考察したりすることができる。	世界の鉱産資源の分布図から鉱産資源の偏在性を読み取ったり、日本の工業地域と生産額の資料から日本の工業地域の特色を読み取ったり、産業廃棄物や環境問題に関する資料を収集して活用したりすることができる。	地域間を比較・関連させて地域的特色を明らかにする視点や方法を身に付け、「産業・資源」について世界的視野から見た日本の地域的特色と日本全体の視野から見た国内の特色を理解しその知識を身に付けている。
1 世界の資源と日本	1	・世界の鉱産資源の分布のかたより ・日本の資源・エネルギー事情とその課題			世界の主な鉱産資源の分布図から、鉱産資源の偏在性について読み取ることができる。	世界の鉱産資源の分布は不均衡であること、日本はエネルギーや鉱産資源のほとんどを輸入にたよるながらも世界の先進工業国になっていることを指摘できる。
2 工業立国・日本の特色	1	・日本の工業の発達による工業地域形成の変化 ・先進工業国日本の国際競争をめぐる悩みや課題	先進工業国日本も、国際競争の波に巻き込まれ、外国製品との競合や関税による貿易摩擦が起こり、産業の転換を求められていることに関心を深めている。		日本の主な工業地域とその生産額の地図や統計から、日本の工業地域の特色について読み取ることができる。	
3 変化する日本の農業	1	・集約的で技術型の日本の農業 ・農産物の自由化とこれからの日本の農業	農産物の貿易自由化や日本の食料自給率の低下がもたらす問題について関心を高め、これからの日本の農業の在り方を考えようとしている。			日本では狭い耕地を高度に利用し、各地域でその地域の特性を生かした生産性の高い農業が営まれていることを指摘できる。
4 世界と日本の林業と漁業	1	・世界から見た日本の林業の特色 ・世界と日本の漁業 ・森が育てる漁業		日本の林漁業の特色と課題について、世界との比較や関連の中で説明することができる。		日本の林漁業の大まかな地域特性と現状を把握し、また課題に気付くことができる。
5 発展するさまざまな産業	1	・日本各地の多様な社会環境に対応する産業 ・自然環境を生かした産業	身近な地域で発展している新しい産業について調べようとしている。	国内の産業が様々な形で発展していることを、社会環境の変化や自然環境の点から考察できる。		
6 国際化時代の産業と環境	1	・日本にくる外国人労働者とその問題 ・日本に進出してくる外国企業 ・地球にやさしいものづくり		産業の発展がもたらす労働者の移動や産業廃棄物の増加、地球規模での環境問題などについて、多面的・多角的に考えることができる。	産業廃棄物や環境問題に関するさまざまな資料を収集し、必要な情報を選んで簡潔にまとめることができる。	

5. 本時の指導

(1) 教材名 変化する日本の農業

(2) 本時の目標

日本では狭い耕地を高度に利用し、各地域でその地域の特性を生かした生産性の高い農業が営まれていることを指摘できる。
農産物の貿易自由化や日本の食料自給率の低下がもたらす問題について関心を高め、これからの日本の農業の在り方を考える。

(3) 本時の指導の構想

本時の目標達成のために、次のような手だてを考えた。

ア 本時の目標 に関して

「日本全体の視野から見た国内の諸地域の特色」を掴ませ、「各地域でその地域の特性を生かした生産性の高い農業が営まれていること」を理解させたい。そのため、まず生徒にとって比較的認知度の高い、米、みかん、乳牛、肉牛（アンケート調査結果を参照）とりんごの都道府県別生産割合のデータを基にして、日本の農業には気候や土地条件等により地域的な特性があることを掴ませる。

また、3種類の夏野菜（トマト、きゅうり、ピーマン）を例に、同じ野菜でも生産地域に3つのパターンがあることを取り上げ、なぜそのようになっているのかをそれぞれの生産地域の自然・社会条件を踏まえて考えさせ、生産性（収益性）の高い農業を目指していることに気付かせたい。その際、グループで話し合わせ、考えを交流させるとともに、下位の生徒を学習活動に参加させて理解を促すようにしたい。なお、どうしても各地域の利点に気付かないグループが合った場合は、TP11「東京へ出荷されるピーマンの量と価格」の資料をOHPで提示し、それを基にして考えさせたい。

イ 本時の目標 に関して

まず、導入で「おもな国の穀物自給率」のグラフから、我が国の穀物自給率が極端に低いことに気付かせたい。グラフ提示の際は各国の自給率データを隠しておき、それぞれの国の自給率がどの位かを予想させて、生徒の知的関心を高めたい。

また「世界的視野から見た日本の地域的特色」に関わって、世界と比べてみた日本の農業の姿を、単位面積当たりの収量や農業従事者一人当たり経営耕地面積、農産物の価格と生産費のデータで確認させる。その上で、日本の農業環境（人々の生活）がどのようになっているかを、農家数や農業人口の変化、貿易自由化による海外との競合、食糧自給率の推移のデータ等で示すことで課題を浮き彫りにし、関心を高めたい。

生徒にとって単位面積当たりの収量の多さは意外だろうが、経営耕地の零細さや農家数の減少等からは改めて問題を感じると思われ。そして、そうした状況の中で海外に依存する日本の農業（食料）の問題にどう対処していけば良いのかを考えさせたい。その際、生産者の立場からだけでなく、食の安全性や量の確保といった面を強調し、消費者の立場からも自分たちの日常的な問題として考えさせるようにしたい。

ウ 予想される生徒のつまずきに関して

生徒の農業に関する既有知識はあまり豊かではないと予想される。そのため、グループでの話し合いが不活発になるおそれがある。加えて、本時で扱う用語（農業に関する「キーワード」）は生徒には難解なものが多く理解に苦しむことも考えられる。そこで、基礎的な用語の定着と話し合い活動の土台作りの面から「日本の農業 キーワード調べ」をプリントして渡し、予習させることで、本時の学習活動推進の布石を打っておきたい。

さらに、農業に関する「キーワード」は文章だけでは実感が湧きにくいと思われるので、できるだけ写真資料や図表の形で提示し、具体的なイメージを持たせることで理解を促したい。

単元の指導構想や校内研究との関わりからも、次のような手だてを考えた。

ア 導入部での復習事項について、反復学習で定着を図るためだけでなく、章の中での各単元の構成の面や本時の授業の布石とする面から考えて吟味した。

イ 社会科の学習の視点を繰り返して復唱させ、授業の展開もその視点にそって組み立てた。そのことによって、他の単元の学習（地理的な分野の学習）に応用が効くようにしたいと考えた。

ウ 作業的な学習やグループでの話し合いの場を取り入れて、生徒の主体的な学習活動が行われるようにした。

エ 教材の開発に関わって、学習内容の裏付けとなる統計資料やより実感を伴った理解を促すための写真等を、できる限り多くの教科書や資料集、統計書をあたって探し、その中から本時の指導により適切なものを選んで組み立てた。

オ 教材の提示の工夫として、資料のほとんどをカラーのTPシートとし、きれいで見やすい資料になるように心がけた。そのことで少しでも学習意欲を高めたいと考えた。また、OHPで提示する際はその利点を生かすようにした。例えば、一斉提示で集中させることができること、生徒と対面しながら（生徒の反応を見ながら）提示することができること、分解提示や部分提示によって知的好奇心をくすぐることができること等を、場面に応じて使い分けた。

(4) 本時の具体的評価規準

到達状況 評価の観点	A：十分満足できる	B：おおむね満足できる	C：「努力を要する」と判断された生徒への手立て
社会的事象への 関心・意欲・態度	・農産物の貿易自由化が生産コストの高い日本の農業経営に与える影響や、日本の食料自給率の低下がもたらす問題について、生産者と消費者双方の立場から考え、これからの日本の農業の在り方を考えようとしている。	農産物の貿易自由化や日本の食料自給率の低下がもたらす問題について関心を高め、これからの日本の農業の在り方を考えようとしている。	・日常の食の安全性や量の確保の面から、貿易自由化と食料自給率への課題意識を高めさせる。
社会的事象についての 知識・理解	・日本では狭い耕地を高度に利用し、それぞれの地域の自然条件や社会条件に応じて生産性を高めるために、促成栽培や抑制栽培、近郊農業などの農業が行われていることを、具体的事例を挙げて指摘できる。	日本では狭い耕地を高度に利用し、各地域でその地域の特性を生かした生産性の高い農業が営まれていることを指摘できる。	・TPシートや写真資料、フラッシュカードを活用し、視覚的に日本の農業の特色を捉えさせる。

(5) 展開

段階	学習内容	学習活動	指導上の留意点 評価と対応	資料等
導入 (7)	既習事項の確認 学習課題の設定	1 資料を基に、既習事項の確認をする。 ・日本の地形 ・日本の気候 ・日本の主な工業地域 2 本時の学習課題を設定する。 ・資料を基に、本時の学習課題を設定する。 食料自給率が低い日本の農業はどのように行われているか - 諸外国と比べた特色と課題 -	テンポ良く和やかに進めながら本時の学習の布石とする。 諸外国に比べて食料自給率が低いことに注目させ、学習課題を設定する。 学習課題は紙板書で提示する。	TP1「日本の地形」 TP2「日本の気候区」 TP3「日本の工業地域」 TP4「主な国の穀物自給率」 PR「授業シート」配付
展開 (38)	予想の発表 学習の視点の確認 検証 ・日本の農業地域（どこで、何が、どの位、どのようにして） ・世界と比べてみた日本の農業（どのようにして） ・日本の農業環境（人々の生活、課題点）	3 課題に対する予想を考え、発表する。 ・農家減少 ・後継者が不足 ・耕地が狭い ・あまり大きな機械は使っていない 4 学習の視点を確認する。 ・どこで ・何が ・どの位 ・どのようにして ・人々の生活 ・課題点 ・対策 5 学習課題について調べ、発表する。 (1) 日本の農業地域を予想し、資料を基に確認する。 ア 農産物と自然、社会的条件との関係を考え、調べる。 ・平地に水田や畑地が広がっている。 ・農畜産物の都道府県別統計表（米、みかん、りんご、乳用牛、肉用牛）をみて、何の生産統計かを考え、発表する。 ・農畜産物の都道府県別統計表をみて、各都道府県の区分（ 、 、 ）がどんなことを基準に分類してあるかを考え発表する。 イ 同じ産物でも生産地が暖かい地域、冷涼な地域、大都市とその周辺に分かれることを踏まえ、それぞれの地域の農業の方法と利点について考えまとめる。 ・暖かい地域は、施設園芸農業で促成栽培をしている。 ・冷涼な地域は、高原野菜などの抑制栽培をしている。 ・大都市とその周辺では、市場に近い利点を生かし、新鮮さを売り物にした近郊農業をしている。 (2) 世界的な視野で比べた場合の、日本の農業の特色を調べる。 ・単位面積当たりの生産量が多い。 ・1人当たりの平均耕地面積はせまい。 ・生産費が高く、農産物の価格が高い。 (3) 日本の農業の特色を踏まえて、日本の農業をめぐる環境を調べる。 ・農家数や農業人口が減少し、兼業化が進んでいる。 ・農産物の輸入自由化によって外国産の農産物との競合が進んでいる。 ・食糧自給率の低下が進行している。	個々の考えを大切にし、和やかに行う。 全員で本時の学習の視点を確認する。 農業に適した自然環境を考えさせる。農畜産物によって地域的な特性があること（どこでどんな農業が盛んか）を確認する。 自然条件と社会条件に目を向けさせ、暖かい地域と冷涼な地域、大都市とその周辺に分けることができることに気付かせる。 それぞれの地域の農業の方法と利点について、予習させた用語解説を参考にして、グループで話し合わせる。用語を写真や統計資料と結び付けてイメージさせ、理解させる。 【知】各地域でその地域の特性を生かした生産性の高い農業が営まれていることを指摘できているか。 C：TPシートや写真資料、フラッシュカードを活用し、視覚的に日本の農業地域の特色を捉えさせる。 統計資料を用いて、世界と比べてみた日本の農業の特色を調べさせる。 統計のあるものは、データの読み取りを大事にして事実をつかませる。輸入自由化については、農家（生産者）と消費者の立場で考えさせる。	TP5「日本の土地利用」 PR「主な農畜産物の都道府県別生産量の全国比」及び「白地図」 TP6「ビニルハウス」 TP7「高原野菜」 TP8,9「近郊農業」 TP10「多種類の野菜生産」 TP11「東京へ出荷されるピーマンの量と価格」 TP12「主な国の1ha当たりの穀物の収穫量」 TP13「農業従事者1人当たりの耕地面積」 TP14,15「農産物の価格と生産費」 TP16「農家形態の推移」 TP17「主な農産物の自給率の移り変わり」
終末 (5)	まとめ（対策） 次時予告	6 日本の農業をめぐる課題点に対して、どのような対策があるかを考え発表する。 ・バイオテクノロジーを利用し、生産性を高める。 ・農家が共同で経営（農業法人化）し、生産性を高める。 ・有機栽培（無農薬栽培）を進め、安全な農産物の提供を進める。 ・消費者のニーズを踏まえた契約栽培等を進める。 7 次時は、世界と日本の林業と漁業について学習することを確認する。	個々の考えを大切にす。 意見が出にくい時は、予習した農業用語や身近な地域の農業環境の変化を基に考えてみるように促す。 【関】貿易自由化と食料自給率の低下について高い課題意識を持ち、これからの日本の農業の在り方について考えようとしているか。 C：日常の食の安全性や量の確保の面から課題意識を高める。	PR「本時の学習資料」（復習用）配付

(6) 板書計画